

令和2年度
稚内市
観光入込客数状況

稚内市
(令和3年6月)

目次

I. 総合的な検証	1
(1) 令和2年度の観光入込の結果と主な要因	1
(2) 今後の観光施策	3
II. 観光入込客数	5
(1) 総合的な観光入込客数の状況	5
(2) 道内客・道外客別の状況	6
(3) 日帰り客・宿泊客別の状況	7
(4) 外国人宿泊客の状況	9
III. 観光客動態調査（アンケート）分析	10
(1) 地域別観光客の入込状況	10
(2) 年代別観光客の入込状況	11
(3) 男女別観光客の入込状況	11
(4) 旅行日程別観光客の入込状況	12
(5) 市内宿泊状況別観光客の入込状況	12
(6) 市内宿泊日数別観光客の入込状況	13
(7) 訪問観光地点別観光客の入込状況	13
(8) 利尻島・礼文島訪問状況別観光客の入込状況	14
(9) 旅行形態別観光客の入込状況	14
(10) 交通手段別観光客の入込状況	15
(11) 来稚回数別観光客の入込状況	15
(12) 旅行理由別観光客の入込状況	16
(13) 近隣市町村観光地点訪問状況別観光客の入込状況	16
IV. 資料	
(1) 観光入込客数総表	17
(2) 外国人宿泊客数総表	18

I. 総合的な検証

(1) 令和2年度の観光入込の結果と主な要因

【年間総括】

令和2年度の観光入込客数は265,100人であり、前年度と比較すると236,600人(47.2%)減少した。その理由は新型コロナウイルス感染症(以下、新型コロナ)の感染拡大による不要不急の外出自粛である。特にその影響が大きく反映されているのは本市の観光トップシーズンである上期で、結果は172,900人であり、前年度と比較して221,600人(56.2%)減少した。一方、下期は92,200人であり、15,000人(14.0%)の減少に留まっており、これは秋以降に向けて国や本市が行った観光施策の影響や、経済活動におけるビジネス客の往来等がコロナ禍でも維持されたためと考えられる。

外国人観光客の宿泊延数は491人泊であり、前年度と比較して18,787人泊(97.5%)減少した。その理由は、新型コロナ感染拡大を抑制するための世界的な渡航の自粛や、国が行った外国人の入国制限などである。

①上期の観光入込客数と観光施策

令和2年度上期の観光入込客数は総数172,900人で、前年の394,500人と比べ221,600人(56.2%)減少した。

月ごとの観光入込客数の状況を見ると、4月7日から5月25日まで国が発出した緊急事態宣言により国民に不要不急の外出自粛が促されたため、4月は前年度比64.3%減、5月は前年度比88.5%減となった。6月は宣言が解除されたことにより若干回復し、前年度比74.0%減となった。7月は月上旬に北海道がどうみん割、下旬に国がGoToトラベルを開始(東京都除外)したことにより国民の観光行動が促進され、前年度比50.5%減まで回復した。上期で最も好調だった月は8月であり、前年度比35.4%減まで回復した。この要因として、年度初めから休止していた稚内羽田便の運航が再開したことが挙げられる。9月には稚内羽田便が再度運航を休止したが、本市の施策であるわからない応援クーポン事業を開始したことも影響し、前年度比39.1%減と持ちこたえた。

道内観光客の推移をみると、上期は105,700人となり、前年の100,900人と比べ4,800人(4.8%)増加した。その理由は新型コロナ感染拡大の要因といわれる三密(密閉・密集・密接)を避け、近隣市町村または圏域内を旅行する形態であるマイクロツーリズムを嗜好する人々が増えたためと考えられる。

上期の観光施策の実行は新型コロナの感染状況に左右された。特に稚内羽田便の長期的な運休、チ

チャーター便の運航中止は大きな打撃となり、予定していた施策の方向性を修正しなければならなかった。さらに、例年実施している国内の旅行会社や航空会社へのプロモーション、旅行博出展、市内の祭事など、対面を主とする活動が制限された。しかし、来るべき観光需要回復期に対応するべく、計画的かつ柔軟に新規事業を実施した。例えば、稚内観光ポータルサイトの構築、観光ポスターの制作、道内客の誘客を目的とした食によるおもてなし事業の実施や全道放送による稚内特集番組の放送、3,000円相当のクーポンを配布するわからない応援クーポン事業の実施などである。後述するが、下期は前年度と比べ上期ほどの落ち込みはなかった。これら上期に実施した施策の影響が下期に現れたことも、その理由の一つであると推察できる。

外国人観光客（インバウンド）の誘客は見込まれる状況ではなかったが、これまで行ってきた誘致促進の歩みを止めず情報発信や受入体制の整備など各種施策を行った。例えば台湾の大手日本旅行サイトへの広告配信や日本在住のインフルエンサーの招請、海外エージェントへの聞き取り調査などである。特に、令和2年度は広域観光周遊ルート事業の最終年であり、事業の総決算として近隣市町村とワークショップを実施し滞在型旅行商品造成を行った。

②下期の観光入込客数と観光施策

令和2年度の下期観光入込客数は総数92,200人で、前年の107,200人より15,000人（14.0%）減少した。

月ごとの観光入込客数の状況をみると、10月は稚内羽田便が一部再開したことや東京都がG o T o トラベルの対象に追加されたこと、わからない観光活性化促進協議会が実施した団体旅行支援などが功を奏し、前年と同等数の31,800人まで回復した。11月には新型コロナが感染拡大傾向になり、稚内羽田便の休止や北海道による集中対策期間の指定（11月7日から3月7日まで）などの動きがあったが、G o T o トラベルや団体旅行支援の影響が残っており、前年度比7.8%減で持ちこたえた。12月は11月から始まっている集中対策期間による不要不急の外出や札幌市民の市外への往来自粛により、本市への帰省等を目的とした旅行が減ったこともあり、前年度比34.3%減となった。1月には国が東京都などを対象に2回目の緊急事態宣言（1月8日から3月21日まで）を行った影響から、前年度比46.3%減となった。2月はわからない観光活性化促進協議会が実施した宿泊助成事業によって個人客が増え、前年比19.7%減まで持ち直した。一方、3月は前年度比24.7%の増となった。その理由は、令和元年度（前年度）3月は北海道独自の緊急事態宣言が発出されるなど新型コロナの拡大開始時期であったことから極端に観光入込が減っているためである。新型コロナ拡大前の平成30年度（前々年

度) 3月と比較すると、令和2年度は44.2%の減となっており、本市の観光入込が回復傾向にあるとはまだ言えない。

道内観光客の推移をみると、下期は43,500人となり、前年度の32,300人と比べ11,200人(34.7%)増加した。これは、下期の観光施策のターゲットを設定するにあたってマイクロツーリズムを嗜好する道内観光客の誘致・受入を強化したことが影響していると考えられる。一方、道外観光客は48,700人となり、前年度の74,900人と比べ26,200人(35.0%)減少した。この結果からは、道外観光客の減少を道内観光客の増加がカバーしたことが読み取れる。

下期の観光施策は、前述した通り、道内観光客のターゲット設定を強化して行った。例えば、9月から継続しているわからない応援クーポンの利用率向上を目的とした道内のインターネット宿泊サイトの利用者へ向けたメルマガ配信、全道放送によるCM広告、稚内発着路線に対し行ったANAとしては全国初となるマイル追加付与キャンペーン、個人客に対する宿泊費助成のてっぺん割などである。これらとマイクロツーリズム嗜好やG o T oトラベルなどが相乗効果をもたらし、道内観光客が増加したとみられる。同時に、上期は壊滅的であった団体旅行への支援も行った。稚内空港または道内空港を利用し、かつ稚内で宿泊する団体旅行を取り扱うエージェントへの支援や団体宿泊助成などである。これらの実施を始めた10月、11月は道外の団体旅行客の増加が顕著である。

外国人観光客(インバウンド)の誘客は、上期と同様、見込まれる状況ではなかったが、今後の誘致促進を期待し各種事業を実施した。例えば、今後需要が見込まれるサイクルツーリズムに対応するための台湾人サイクリストとの体験走行や意見交換、宗谷地域の観光スポットを二次元バーコード及び多言語で案内するウェブコンテンツの整備などである。また、広域観光周遊ルート事業が終了するにあたって、北海道や各自治体と次年度以降の新たな体制へのスムーズな移行を検討した。

(2) 今後の観光施策

このように、令和2年度の観光施策は新型コロナウイルスの感染状況に大きな影響を受けた。従来、稚内市の観光入込のうち道外観光客は全体の7割弱で推移しており、その観光行動の起因は「日本の最北に行きたい」という欲求にあると考えられる。しかし、その欲求は新型コロナ拡大防止のための不要不急の外出自粛、旅行自粛により大きく制限された。その上、稚内羽田便やチャーター便の運休などもあった結果、令和2年度の道外観光客の割合は全体の4割弱に減少した。国民へのワクチンの接種が進むにつれてその状況も変化していくと思われるが、それを待たずに観光客が安心できる体制を整えることや、稚内羽田便の運航継続を働きかけることが重要である。

令和3年度においても新型コロナの完全終息は考えにくく、新型コロナと共存した持続性の高い観

光を目指していく必要がある。マイクロツーリズムはコロナ禍のような不測の事態において観光業界を下支えするものであり、今後も道内観光客の誘致・受入を積極的に行っていく。アクティビティ、自然、文化体験の要素うち、2 つ以上で構成される旅行であるアドベンチャーツーリズムもコロナ禍において有効な観光形態と考えられている。本市としてもアドベンチャーツーリズムを含め滞在型の観光コンテンツの磨き上げや造成を引き続き行っていく必要がある。

外国人観光客（インバウンド）の回復の見通しは立っていない。しかし、令和3年度6月現在、欧米豪などは新型コロナのワクチン接種がアジア圏と比べ速い速度で進んでいる。令和3年度には広域周遊ルート事業の後継事業である広域周遊促進事業が開始されるため、観光需要回復期のタイミングを逃すことなく、これまで培ったノウハウを生かし外国人観光客の獲得に向け準備を進めていく。

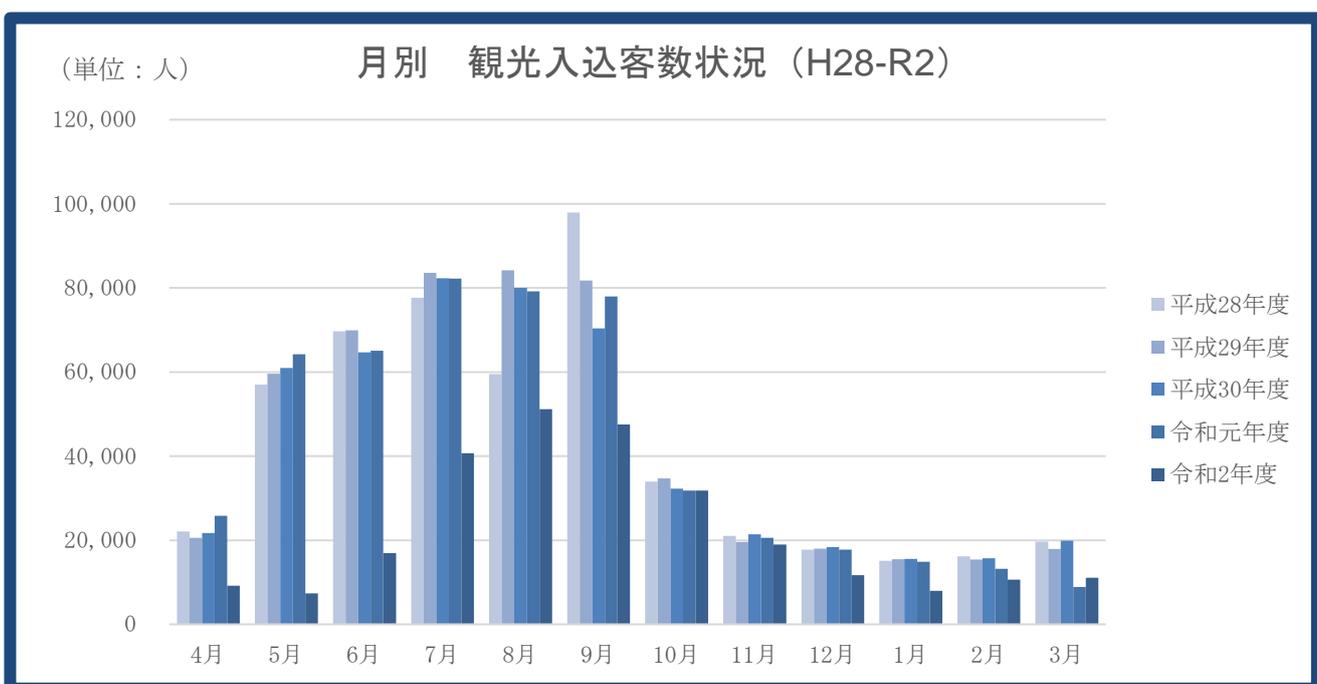
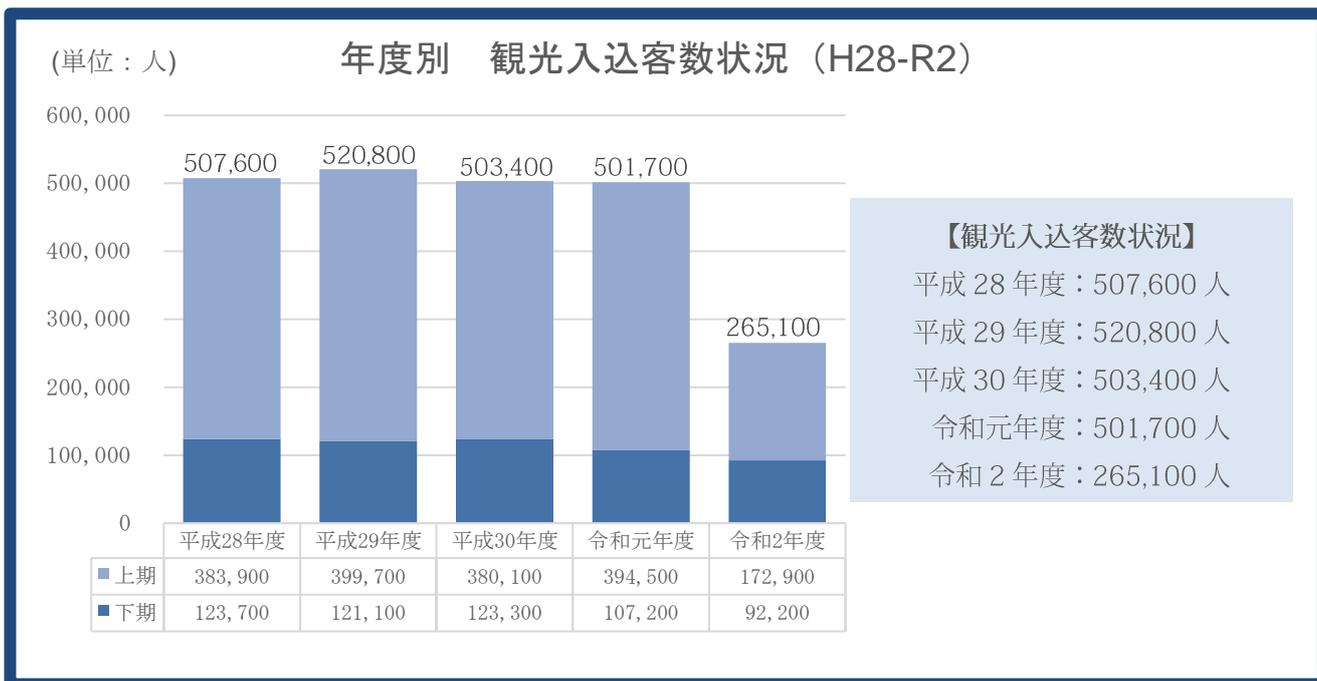
さらに将来に向けた取り組みとして、特に重要と位置付けているのは地域連携DMOである。現在、その設立に向け北宗谷地域の自治体や観光協会等の関係団体と協議を行っている。北宗谷全域での広域連携による地域経済の活性化を目指し、組織構築や戦略づくりに取り組み「稼ぐ観光地域」を目指していく。

新型コロナ完全終息後の観光需要に改めて期待し、今後も社会情勢や観光市場の変化を見極めながら柔軟な観光施策を展開していきたい。

Ⅱ. 観光入込客数

(1) 総合的な観光入込客数の状況

令和2年度観光入込客数は、総数 265,100 人で、前年の 501,700 人より 236,600 人 (47.2%) 減少した
【上期】 172,900 人で、前年の 394,500 人より 221,600 人 (56.2%) 減少した。
【下期】 92,200 人で、前年の 107,200 人より 15,000 人 (14.0%) 減少した。

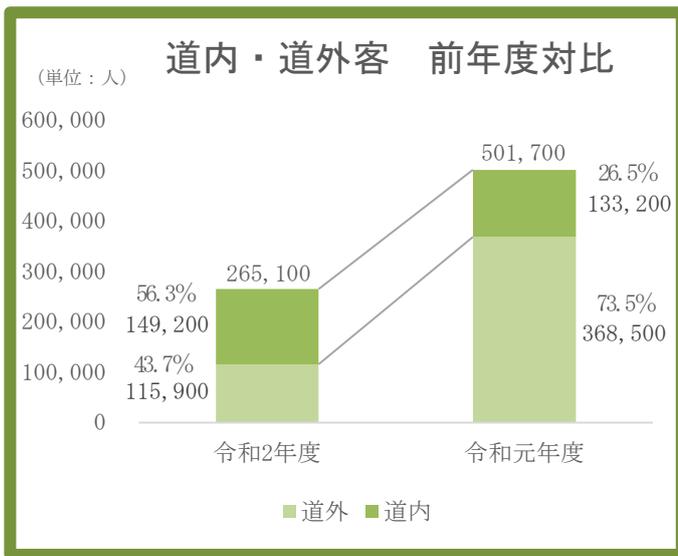


(2) 道内客・道外客別の状況

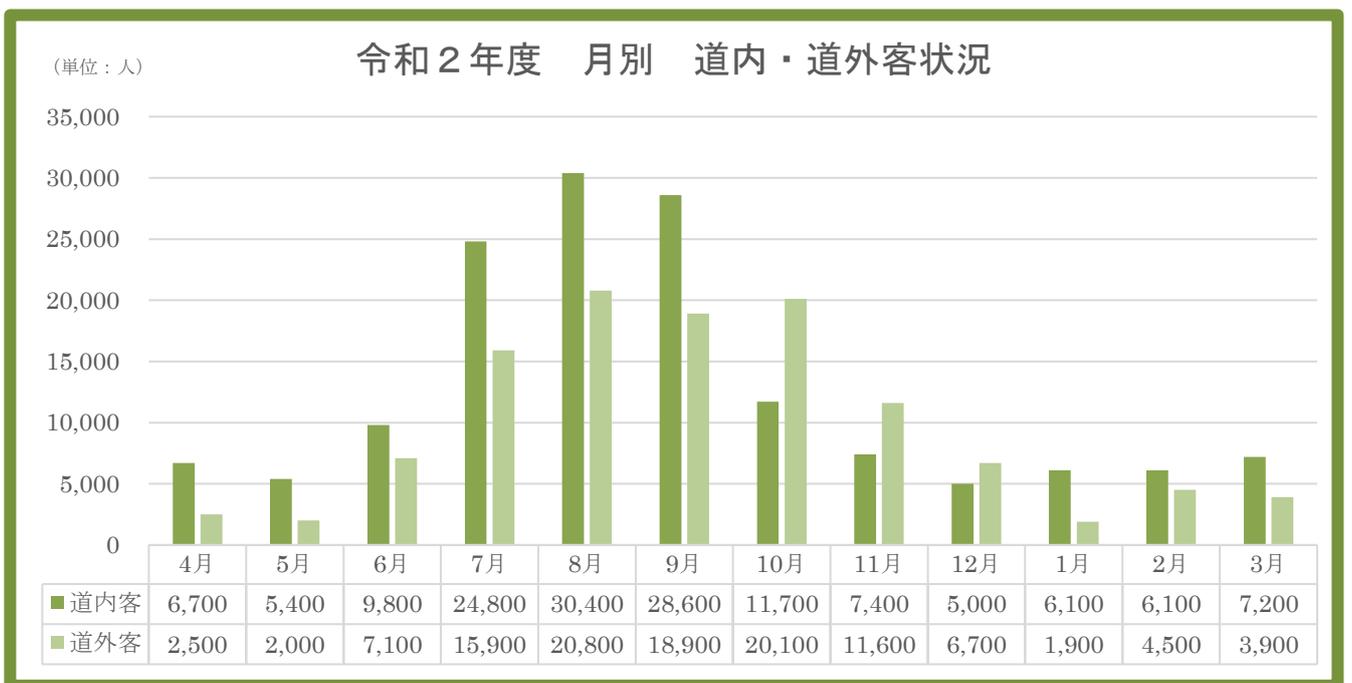
道内客は 149,200 人で前年の 133,200 人より 16,000 人 (12.0%) 増加、道外客は 115,900 人で前年の 368,500 人より 252,600 人 (68.5%) 減少した。

【上期】道内客は 105,700 人で前年の 100,900 人より 4,800 人 (4.8%) 増加、道外客は 67,200 人で前年の 293,600 人より 226,400 人 (77.1%) 減少した。

【下期】道内客は 43,500 人で前年の 32,300 人より 11,200 人 (34.7%) 増加、道外客は 48,700 人で前年の 74,900 人より 26,200 人 (35.0%) 減少した。



区 分		令和2年度	令和元年度
道内客	上期	105,700 人	100,900 人
	下期	43,500 人	32,300 人
道外客	上期	67,200 人	293,600 人
	下期	48,700 人	74,900 人
上期合計		172,900 人	394,500 人
下期合計		92,200 人	107,200 人
合 計		265,100 人	501,700 人



(3) 日帰り客・宿泊客別の状況

日帰り客は81,400人で前年の203,200人より121,800人(59.9%)減少した。

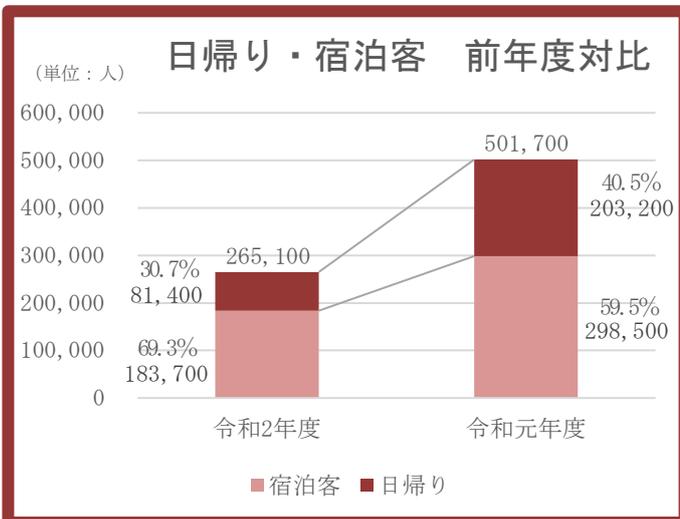
【上期】63,400人で前年の188,600人より125,200人(66.4%)減少した。

【下期】18,000人で前年の14,600人より3,400人(23.3%)増加した。

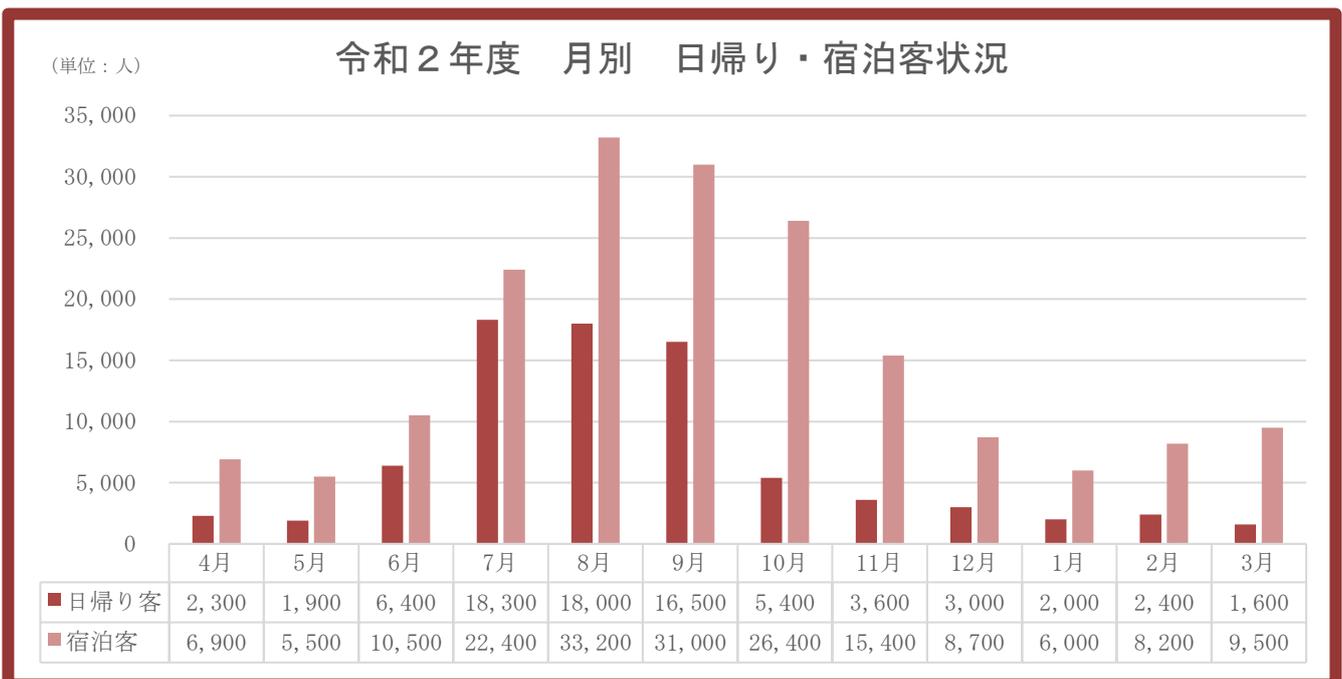
宿泊客は183,700人で前年の298,500人より114,800人(38.5%)減少した。また、宿泊客延数は240,600人で前年の366,300人より125,700人(34.3%)減少した。

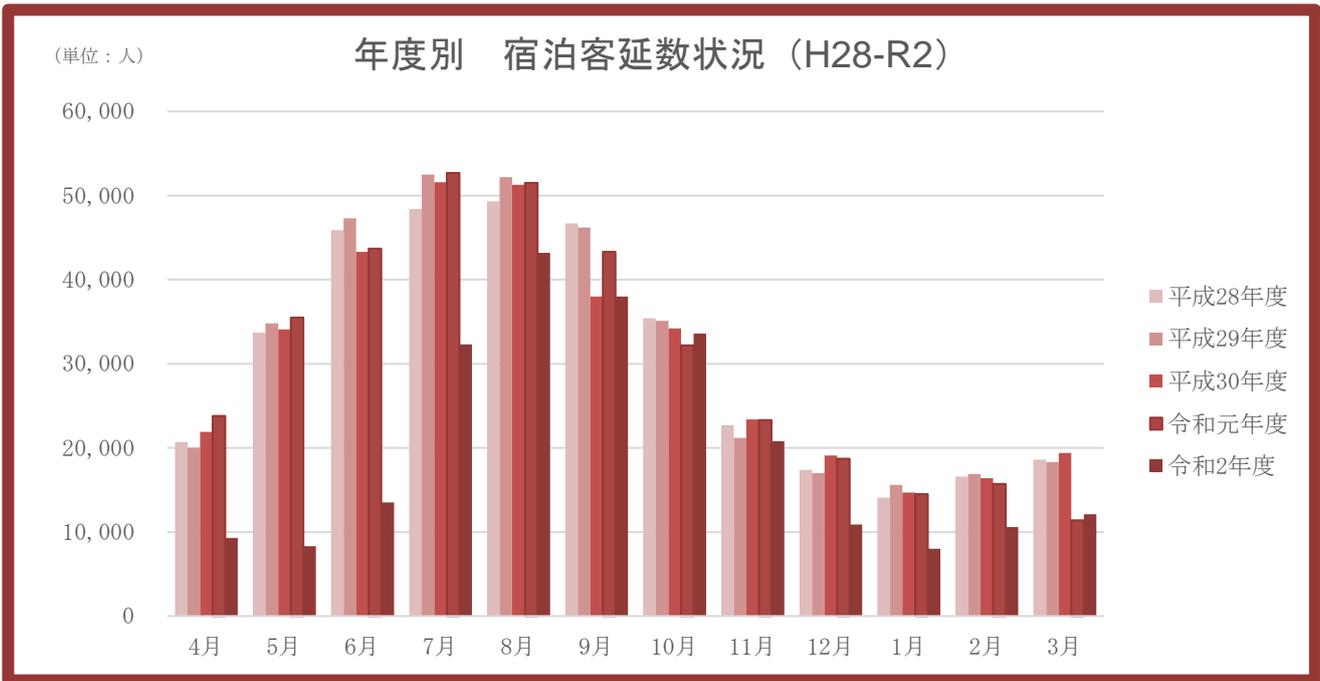
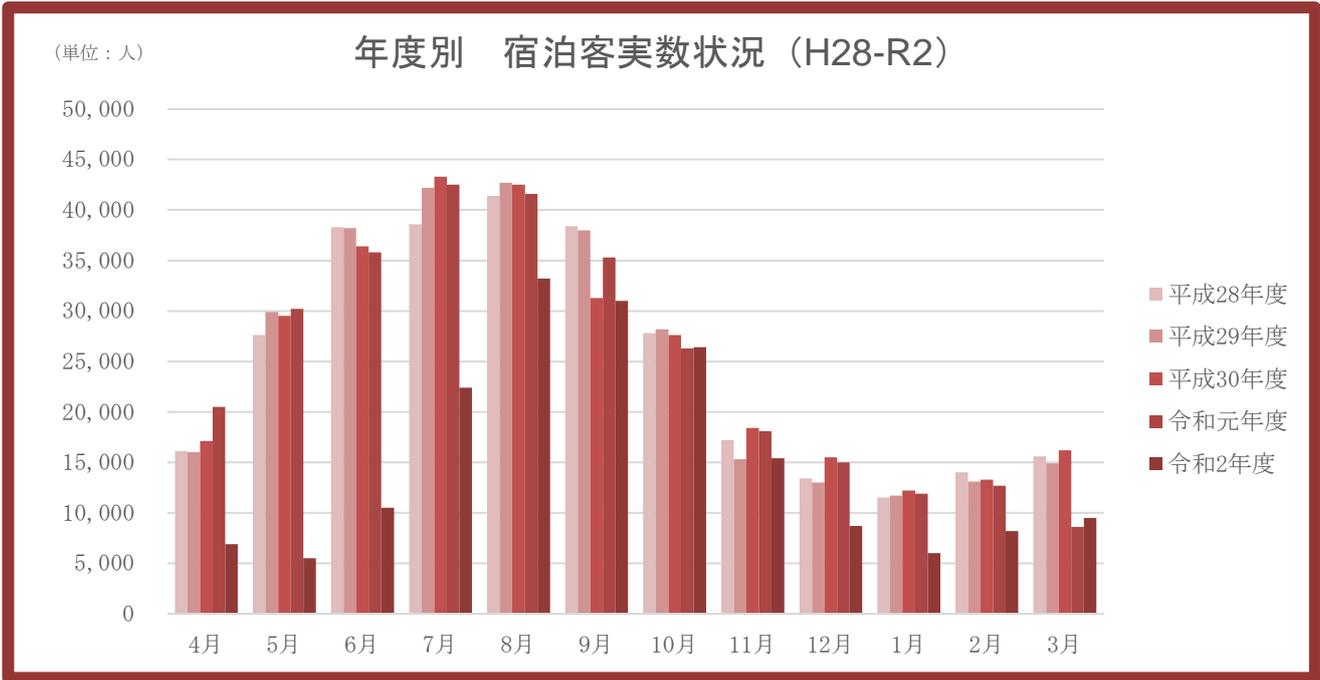
【上期】宿泊客は109,500人で前年の205,900人より96,400人(46.8%)減少した。また、宿泊客延数は144,600人で前年の250,500人より105,900人(42.3%)減少した。

【下期】宿泊客は74,200人で前年の92,600人より18,400人(19.9%)減少した。また、宿泊延数は96,000人で前年の115,800人より19,800人(17.1%)減少した。



区 分		令和2年度	令和元年度
日帰り	上期	63,400人	188,600人
	下期	18,000人	14,600人
宿泊	上期	109,500人	205,900人
	下期	74,200人	92,600人
上期合計		172,900人	394,500人
下期合計		92,200人	107,200人
合 計		265,100人	501,700人





【宿泊客状況 (実数)】

	上期	下期	合計
平成28年度	200,400人	99,500人	299,900人
平成29年度	207,000人	96,200人	303,200人
平成30年度	200,100人	103,200人	303,300人
令和元年度	205,900人	92,600人	298,500人
令和2年度	109,500人	74,200人	183,700人

【宿泊客状況 (延数)】

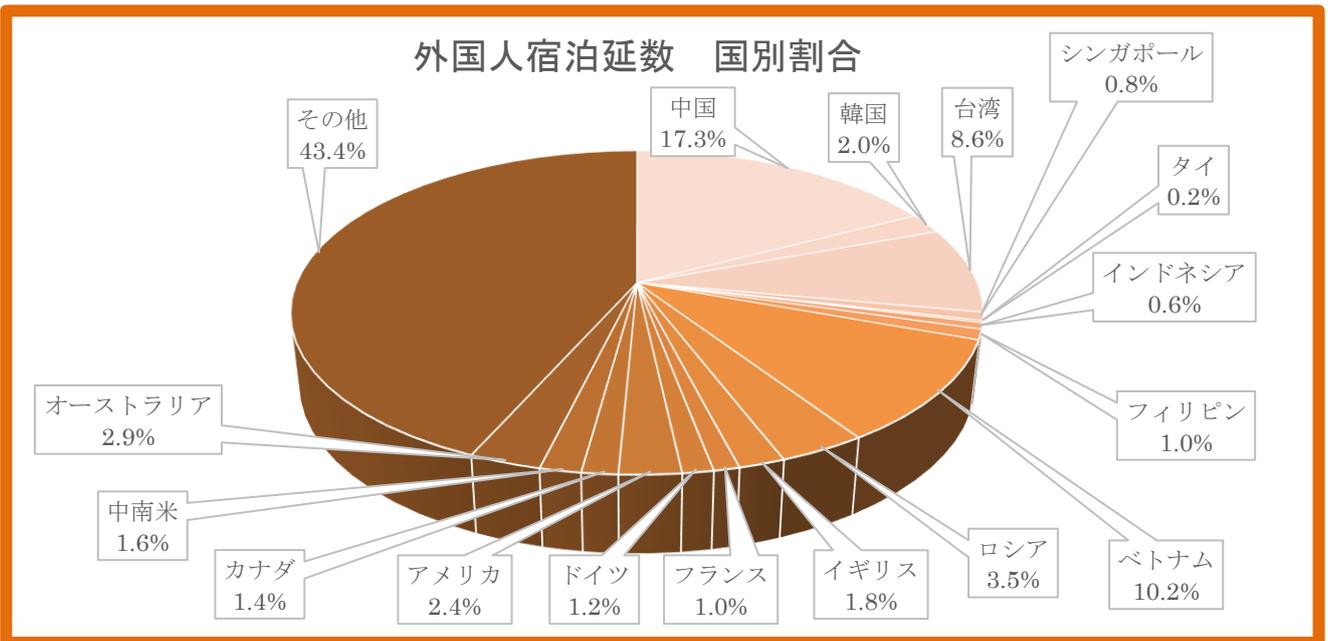
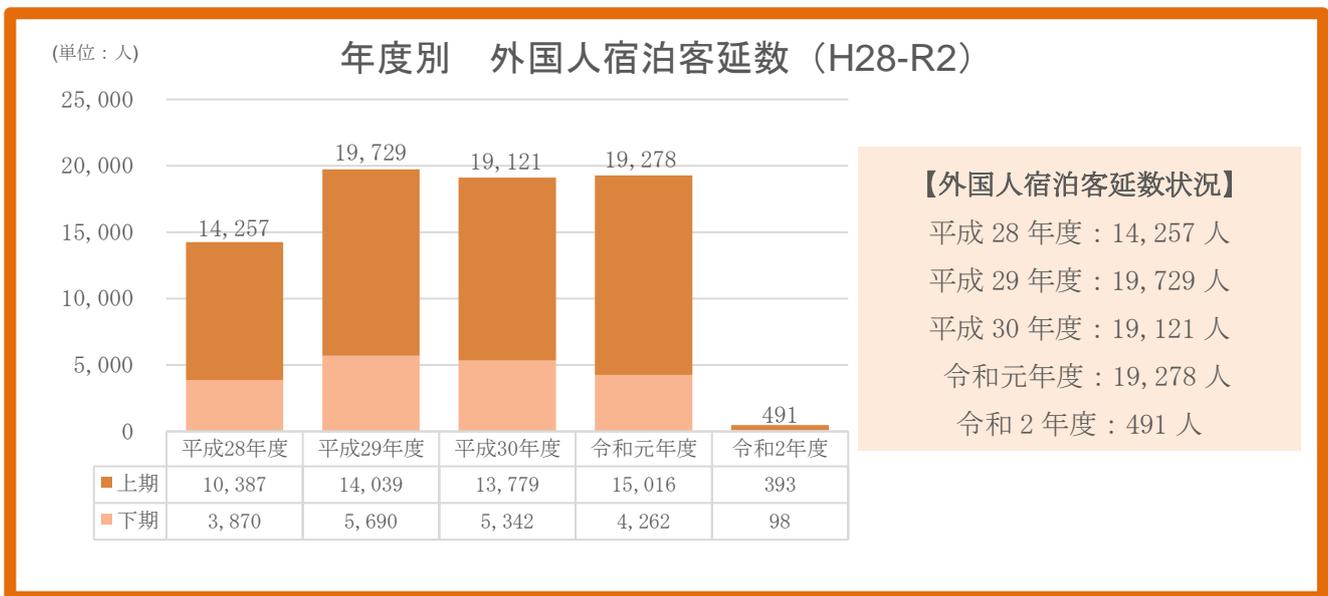
	上期	下期	合計
平成28年度	244,700人	124,800人	369,500人
平成29年度	253,000人	124,100人	377,100人
平成30年度	240,200人	127,200人	367,400人
令和元年度	250,500人	115,800人	366,300人
令和2年度	144,600人	96,000人	240,600人

(4) 外国人宿泊客の状況

外国人宿泊客延数は491人泊で前年の19,278人泊より18,787人泊(97.5%)減少した。宿泊客の国別内訳は、中国が85人泊(17.3%)と最も多く、続いてベトナムが50人泊(10.2%)、台湾が42人泊(8.6%)である。外国人宿泊客はそのほとんどが日本在住者とみられる。

【上期】宿泊延数は393人泊で前年の15,016人泊より14,623人泊(97.4%)減少した。宿泊者の国別内訳は、中国が77人泊(19.6%)と最も多く、続いて台湾が41人泊(10.4%)、ベトナムが27人泊(6.9%)である。

【下期】宿泊延数は98人泊で前年の4,262人泊より4,164人泊(97.7%)減少した。宿泊者の国別内訳はベトナムが23人泊(23.5%)と最も多く、続いて中国が8人泊(8.2%)、ロシアとオーストラリアが4人泊(4.1%)である。



Ⅲ. 観光客動態調査（アンケート）分析

☆注意☆

前章で用いたデータ値は、交通データやホテル旅館業への聞き取り調査から得ている。
一方、この章で用いたデータ値は、観光客への直接的なアンケート調査から算出したものであるため、前章の分析結果と若干の差が生じている。

（１）地域別観光客の入込状況

令和２年度の地域別観光客の入込状況は、いずれも新型コロナの影響により、前年度と比較して大きな変動があった。

①道内観光客の入込状況

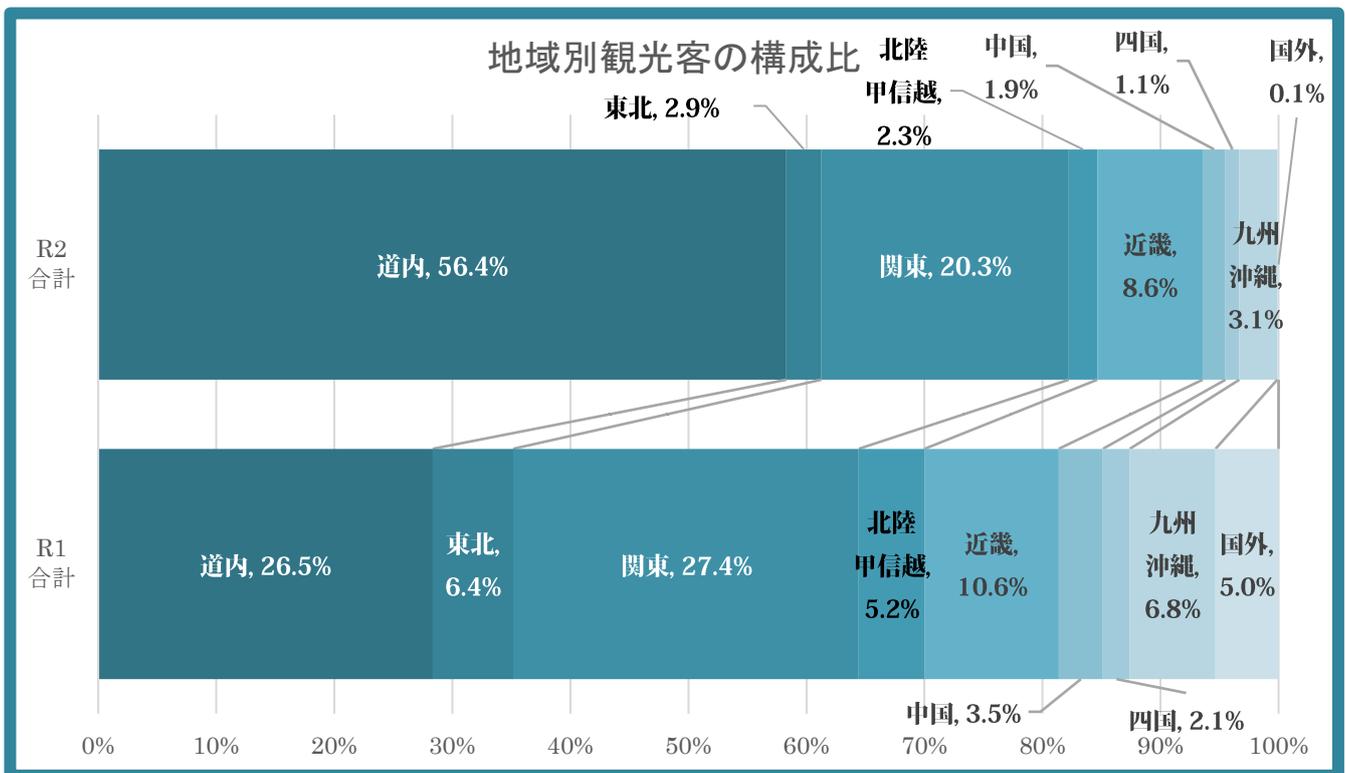
道内観光客の割合の増加（26.5%⇒56.4%）は、新型コロナの影響により道外観光客の割合が減ったことやマイクロツーリズムを嗜好する観光客が増えたことが影響していると考えられる。

②道外観光客の入込状況

東北から九州沖縄までの道外観光客の割合の減少（69.3%⇒43.9%）は、新型コロナの影響により団体旅行の催行が減少したことや、圏域外への個人旅行の機運が高まらなかったことが原因と考えられる。

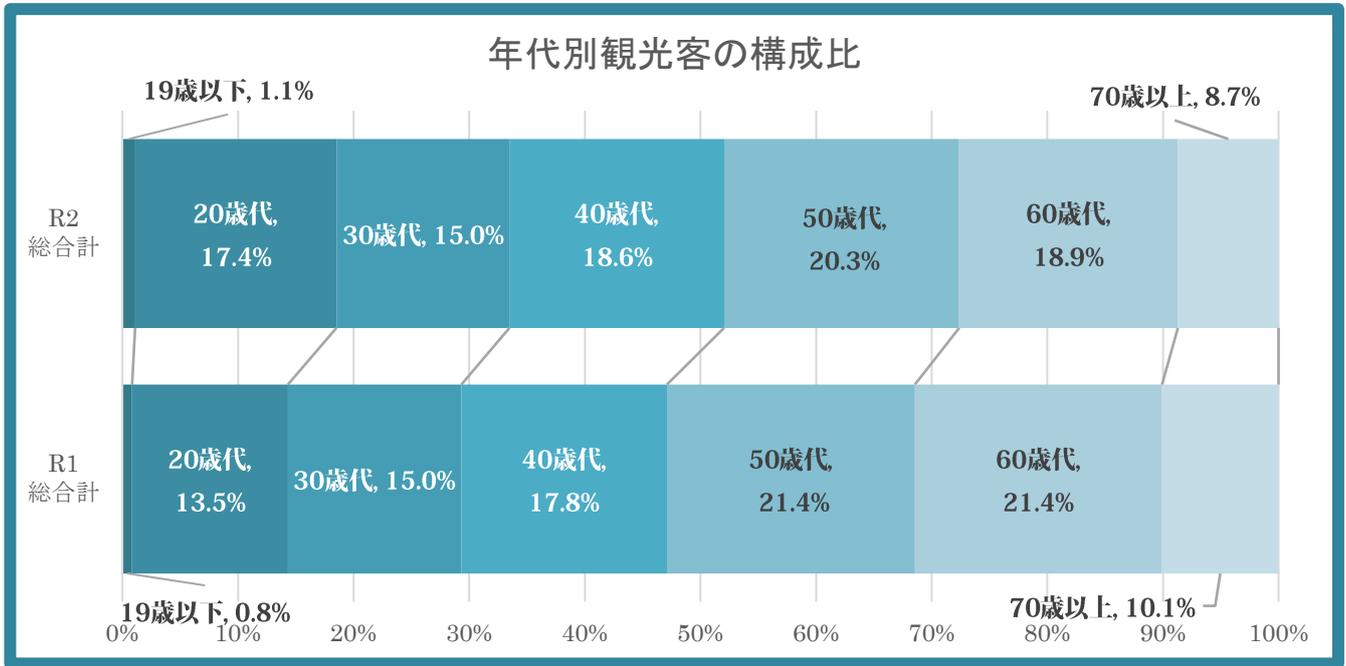
③外国人観光客の入込状況

外国人観光客（国外）の割合の減少（5.0%⇒0.1%）は、新型コロナの影響による渡航自粛や国の入国制限にあると考えられる。



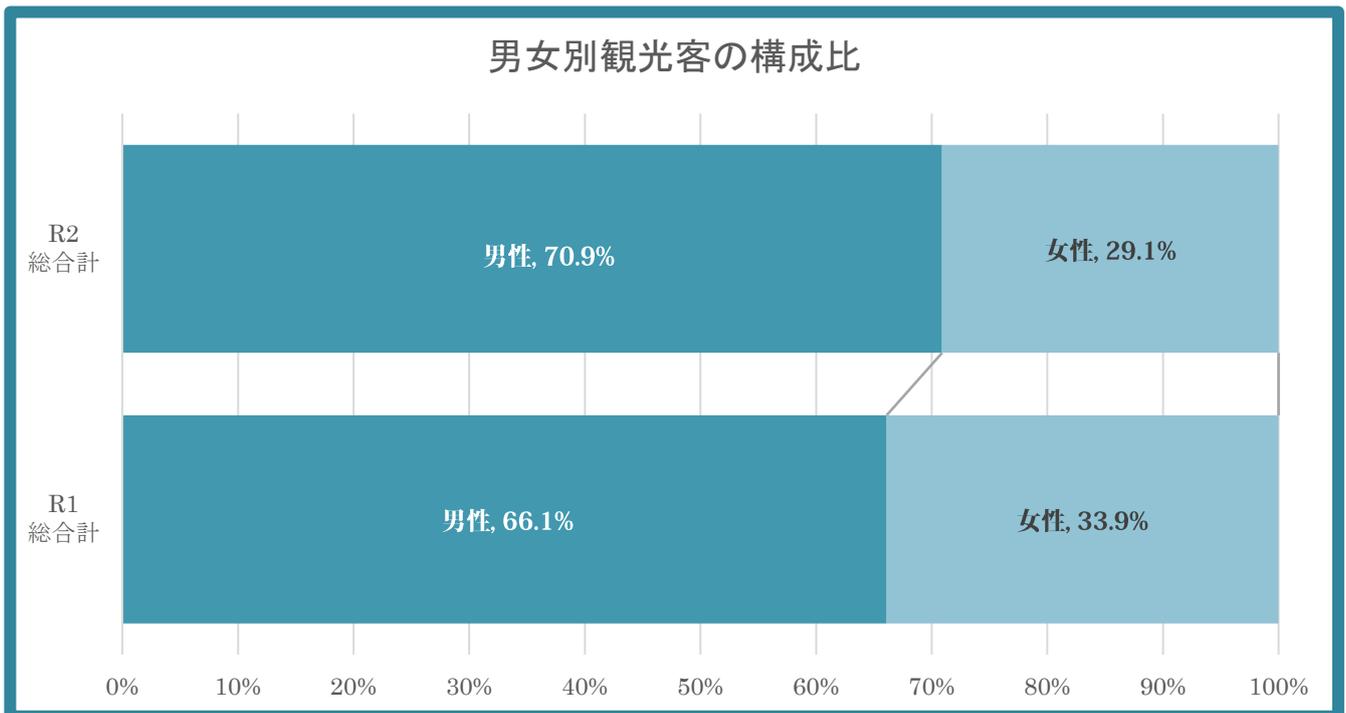
(2) 年代別観光客の入込状況

年代別観光客の入込状況は、40歳未満の年代の割合の増加（47.1%⇒52.1%）が著しい。これは主に高齢層が利用する団体旅行の催行が減ったため、相対的に個人旅行を主とする若年層の割合が増えたことや、マイクロツーリズム嗜好の高まりによる自動車でのドライブ旅行の増加があると考えられる。



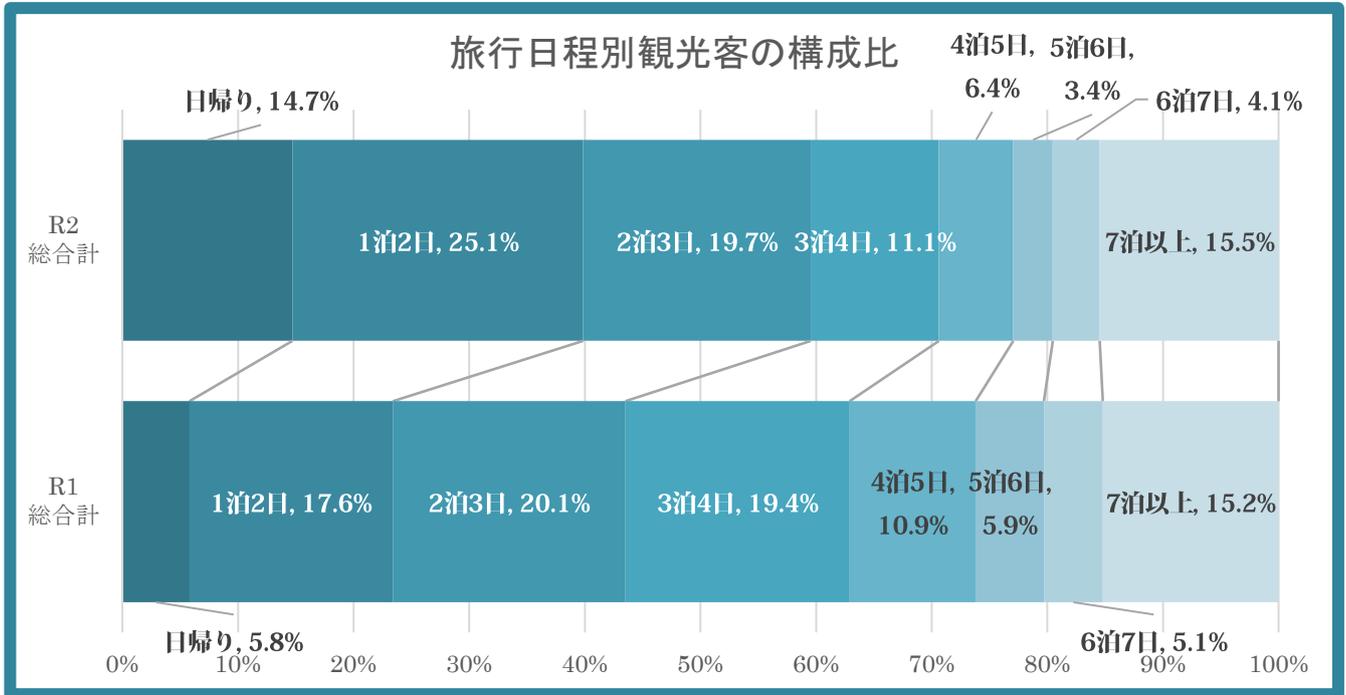
(3) 男女別観光客の入込状況

過去3年間、女性の割合が増えて続けていた男女別観光客の入込状況だったが、令和2年度は男性の割合が増加（66.1%⇒70.9%）した。これは比較的男性が多いと思われるビジネス客の変動が少なかったためと考えられる。



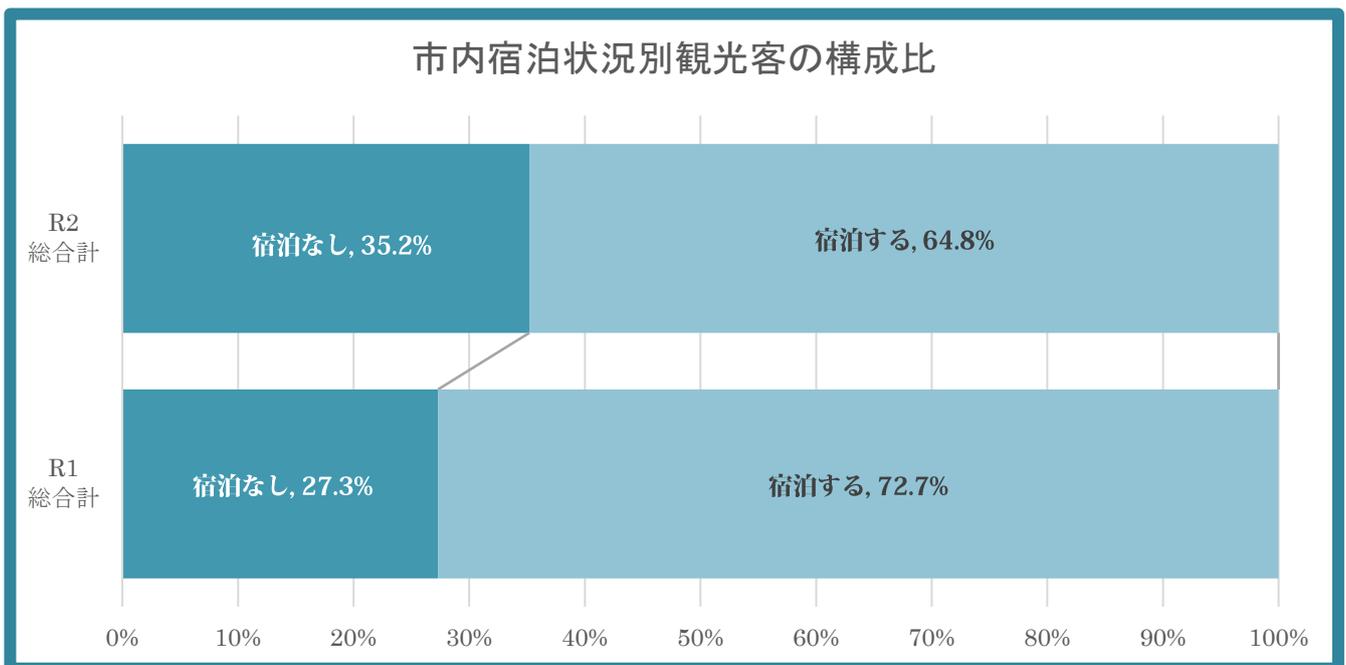
(4) 旅行日程別観光客の入込状況

旅行日程別観光客の入込状況は、日帰り（5.8%⇒14.7%）や1泊2日（17.6%⇒25.1%）の割合が増えた。これは道内観光客の割合が増えたことと連動していると推察できる。その反面、2泊3日以上長期旅行の割合は減っている。これは道外観光客の減少と連動していると推察できる。



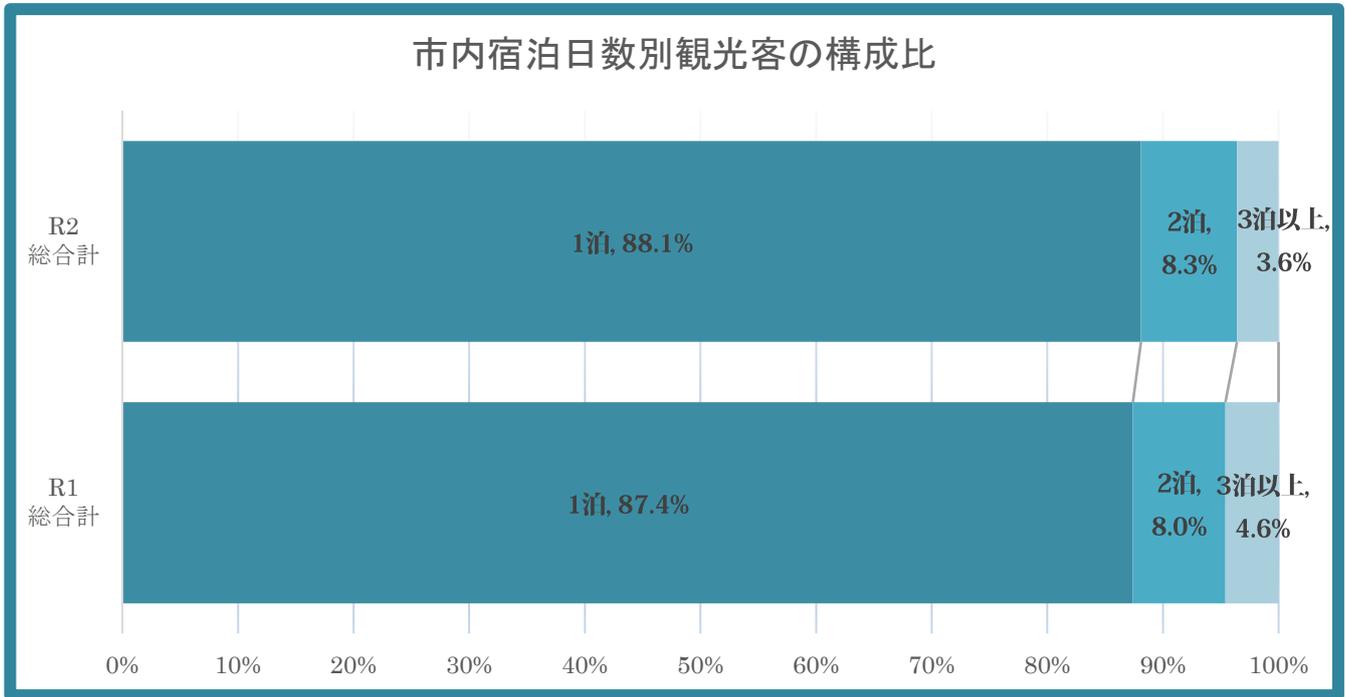
(5) 市内宿泊状況別観光客の入込状況

市内宿泊状況別観光客の入込状況は、本市に宿泊すると答えた旅行者の割合が減少（72.7%⇒64.8%）した。これは道内観光客の割合の増加による日帰り旅行が増えたことが要因と考えられる。



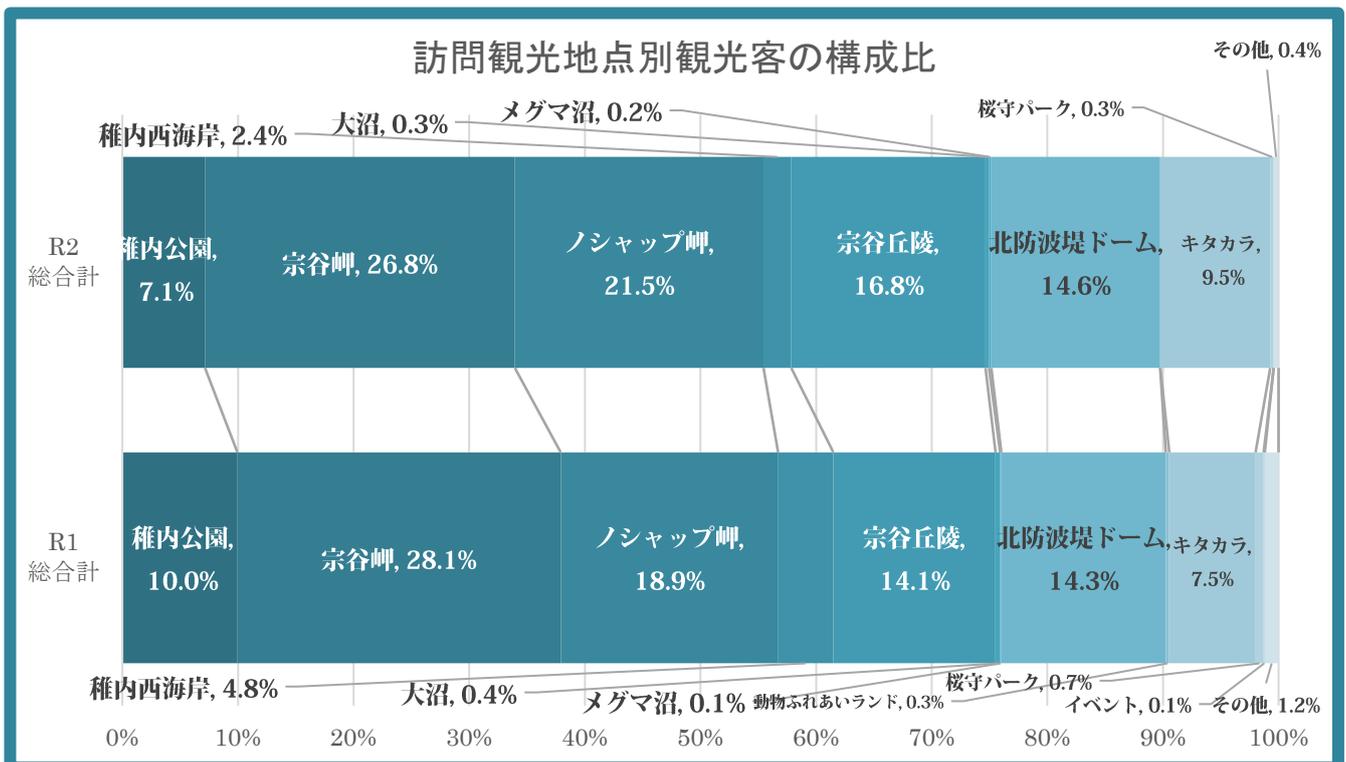
(6) 市内宿泊日数別観光客の入込状況

市内宿泊日数別観光客の入込状況は前年度と比較し大きな変化はなかったが、2泊以上が若干減少(12.6%⇒11.9%)し、その分、1泊が増加(87.4%⇒88.1%)した。



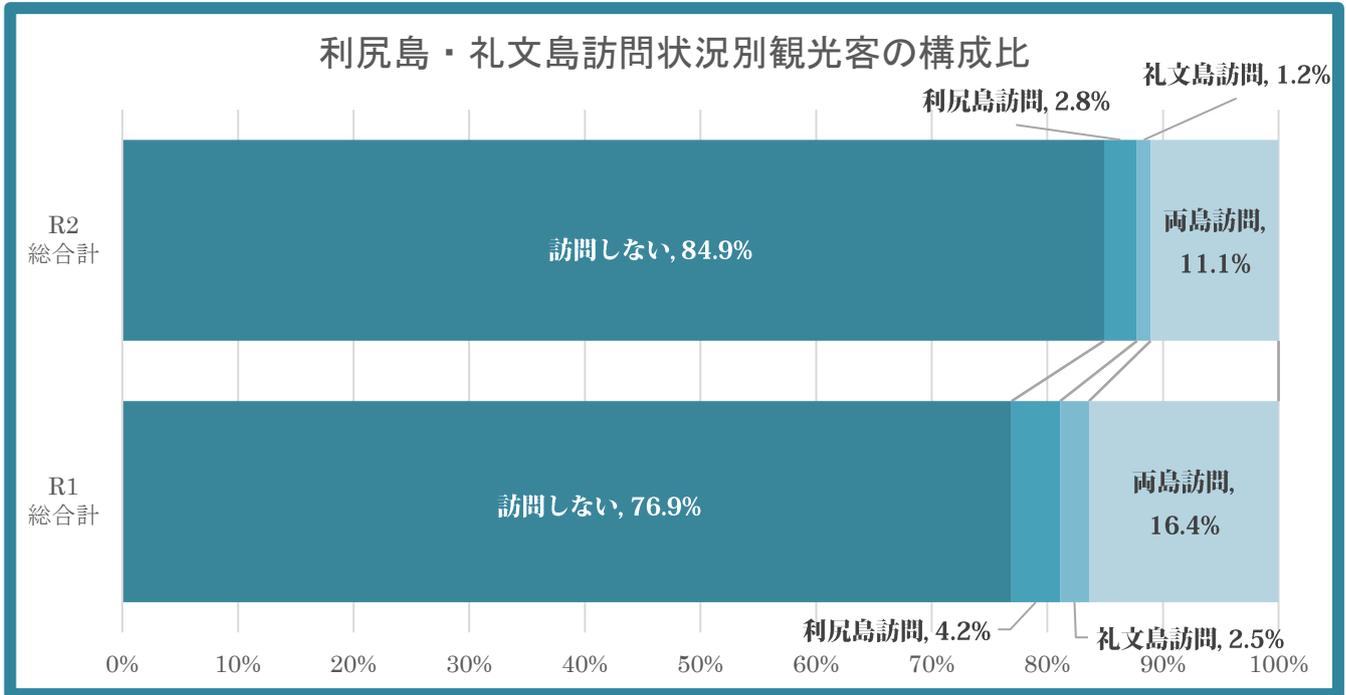
(7) 訪問観光地点別観光客の入込状況

訪問観光地点別観光客の入込状況は多少の変動があるが、前年同様、宗谷岬・ノシャップ岬・宗谷丘陵・北防波堤ドーム・稚内公園・キタカラで全体の9割以上を占めている。



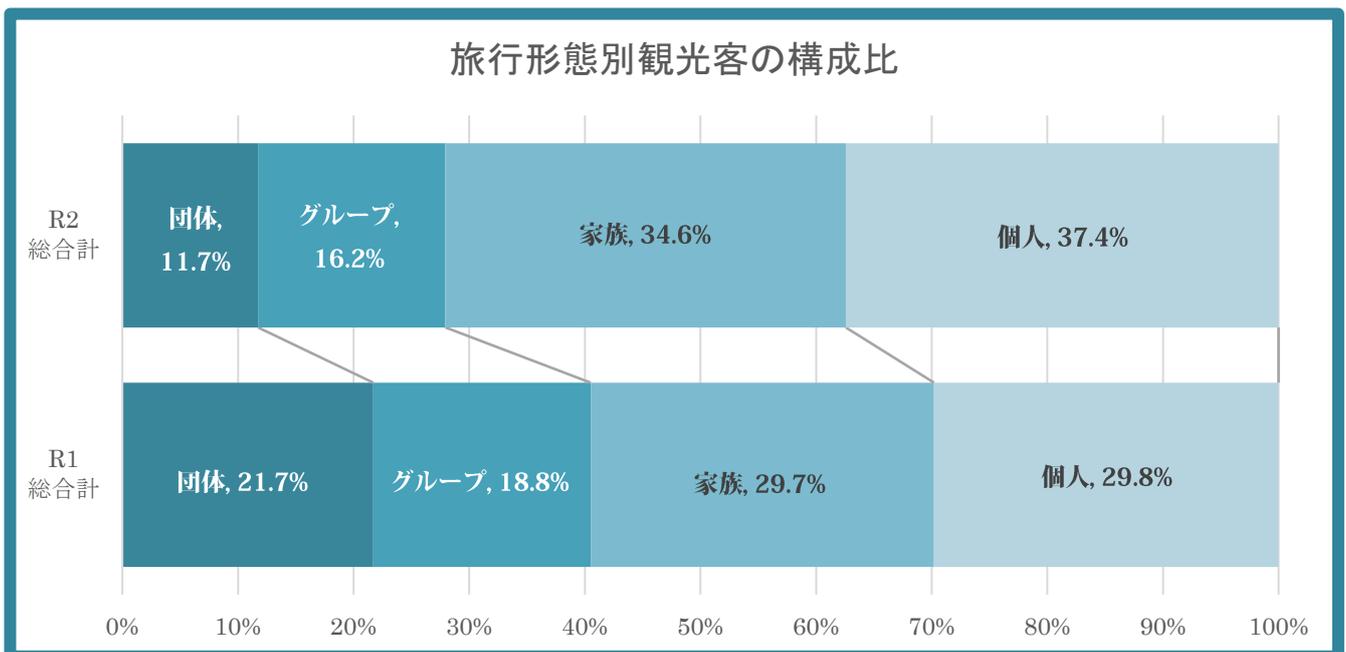
(8) 利尻島・礼文島訪問状況別観光客の入込状況

利尻島・礼文島訪問状況別観光客の入込状況は、利尻島・礼文島をいずれも訪問しないと答えた観光客が増加（76.9%⇒84.9%）している。この原因は、新型コロナの影響により、両島が観光客へ来島自粛を促したことや団体旅行の催行が減ったことなどがあるとみられる。



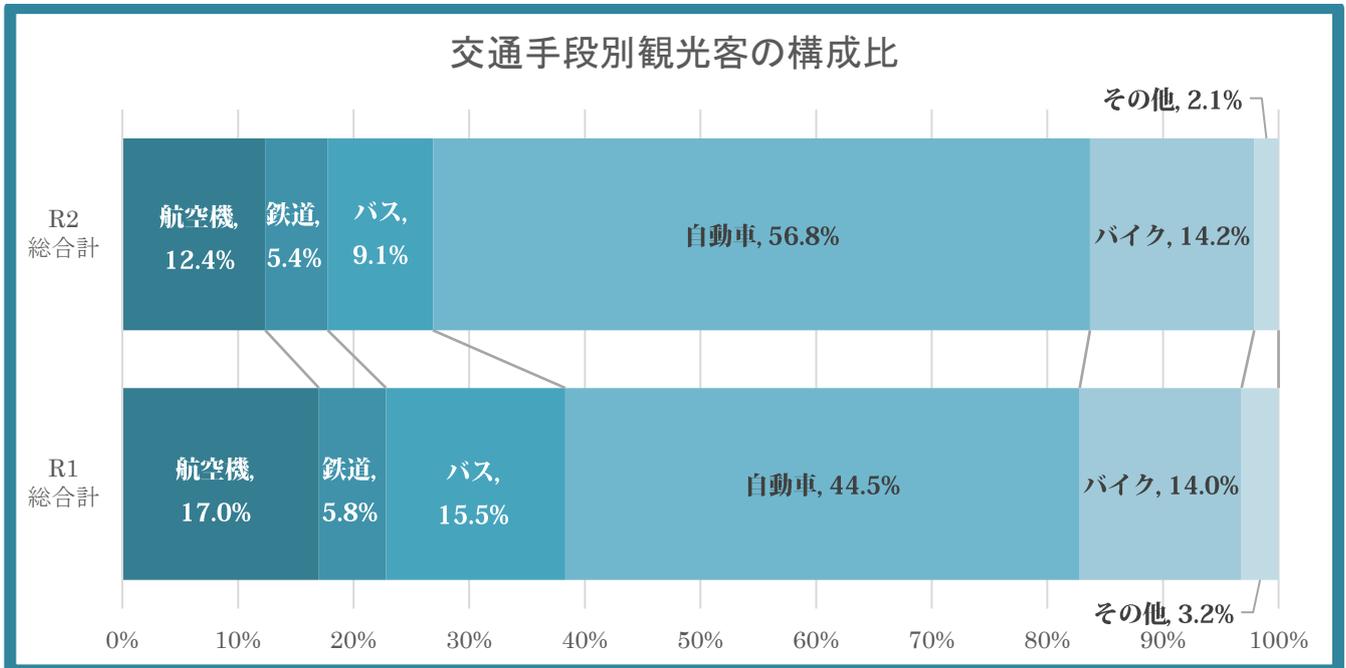
(9) 旅行形態別観光客の入込状況

旅行形態別観光客の入込状況は、家族旅行（29.7%⇒34.6%）や個人旅行（29.8%⇒37.4%）の割合が増加した一方、団体旅行やグループ旅行の割合は減少している。これらの要因は団体旅行の催行中止やグループでの旅行の機運が下がったことなどの影響があると考えられる。



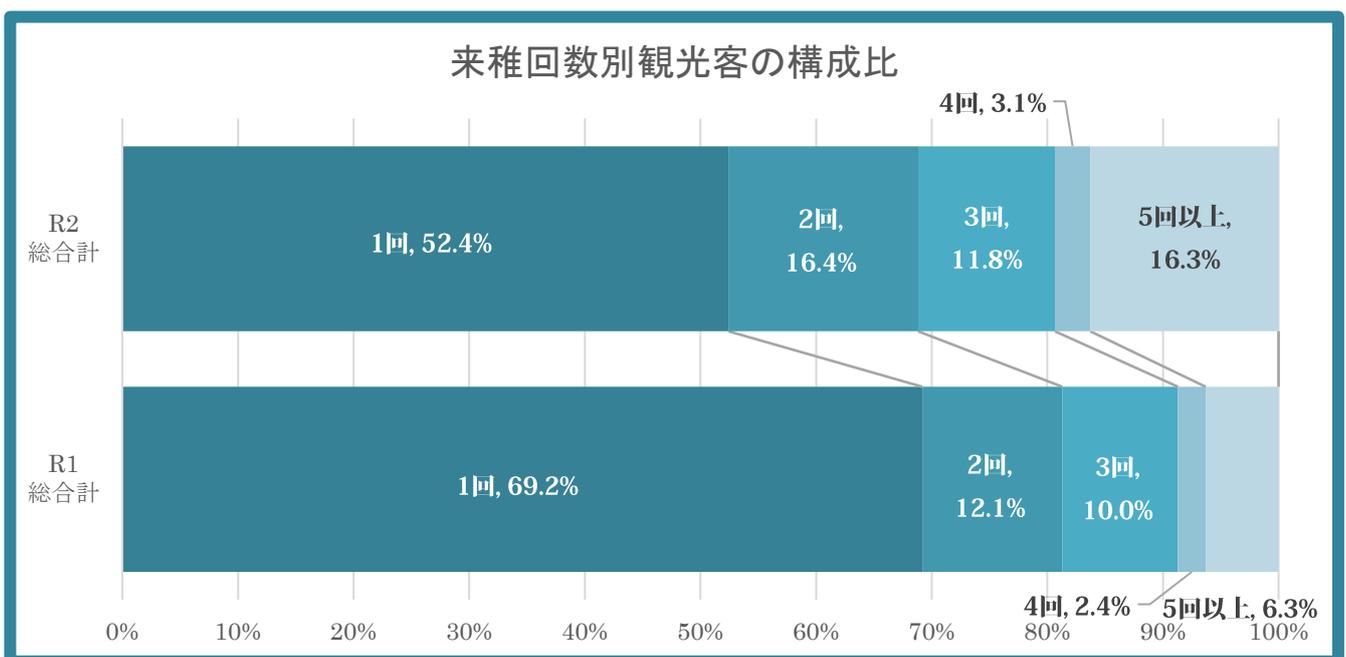
(10) 交通手段別観光客の入込状況

交通手段別観光客の入込状況は、航空機（17.0%⇒12.4%）、バス（15.5%⇒9.1%）の割合が減少し、自動車（44.5%⇒56.8%）の割合が増加した。これは、航空機やバスを利用する団体旅行の催行が減ったこととあわせ、主に自動車を使って移動する道内観光客の増加やマイクロツーリズム嗜好の高まりに関連するものとみられる。



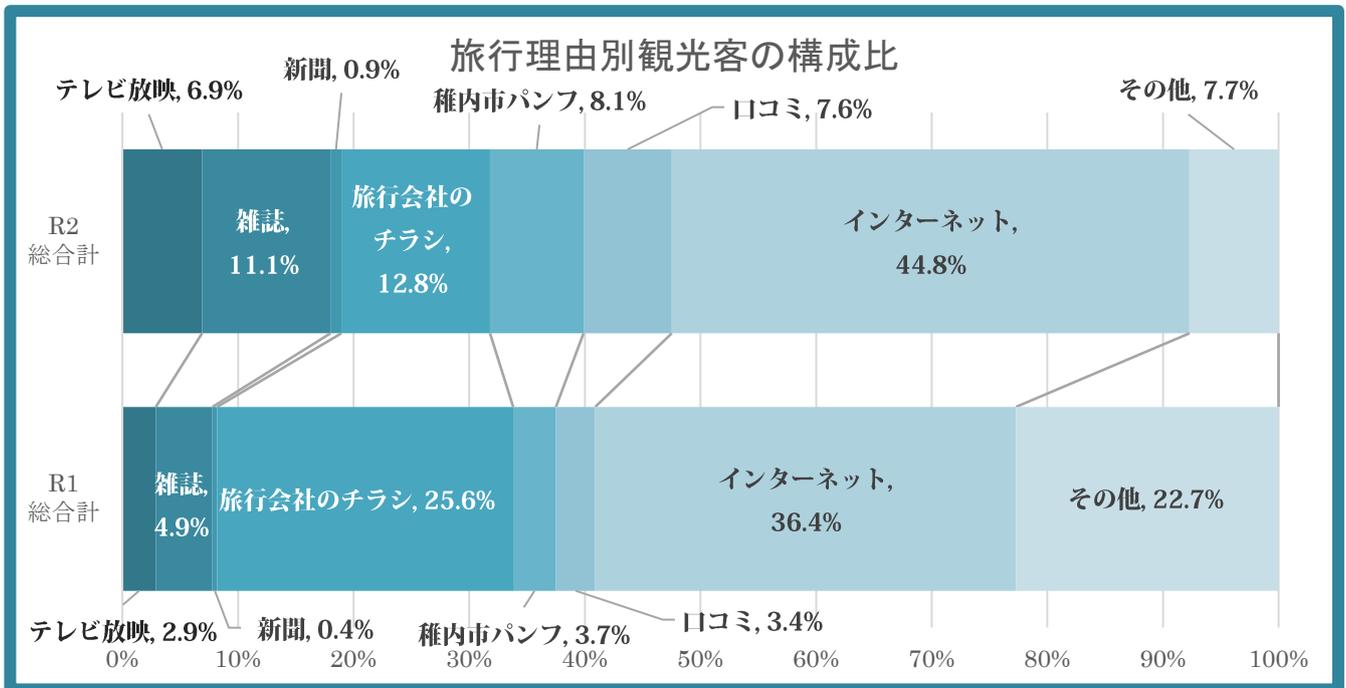
(11) 来稚回数別観光客の入込状況

来稚回数別観光客の入込状況は、初めて本市を訪れた観光客（1回）の割合が減少（69.2%⇒52.4%）し、2回以上の割合が増加した。これは初めて本市を訪れるような道外観光客の割合が減少したこと、同時に複数回の来稚経験を持つ道内観光客やビジネス客の割合が増加したことによると考えられる。



(12) 旅行理由別観光客の入込状況

旅行理由別観光客の入込状況は、旅行会社のチラシの割合が減少（25.6%⇒12.8%）し、テレビ放映、雑誌、稚内市パンフ、口コミ、インターネットの割合がいずれも上昇した。これは、団体旅行の催行が減少したこととあわせ、今年度はテレビの特集番組やCM放送、フィルムコミッションによるマスメディアの取材受入強化、雑誌広告出稿、インターネットでの情報発信に力を入れたためと考えられる。



(13) 近隣市町村観光地点訪問状況別観光客の入込状況

近隣市町村観光地点訪問状況別観光客の入込状況は、オロロンライン（35.4%⇒44.1%）や猿払公園（20.7%⇒23.6%）の割合が増加した。これはいずれも国道や道道などの幹線道路沿いに位置することから、移動手段として自動車の割合が増加したことと連動しているものと考えられる。

